

# 北のとびら

vol. 114

平成30年3月

## 特集

北海道戯曲賞

対談

土田英生×斎藤歩

この人に注目

尾崎 要

アートの子カラを考える

びょういんあーと

ぷろじえくと

街歩きアート

人と人がつながり合い、

新しいものを創り出す

スイートなまち

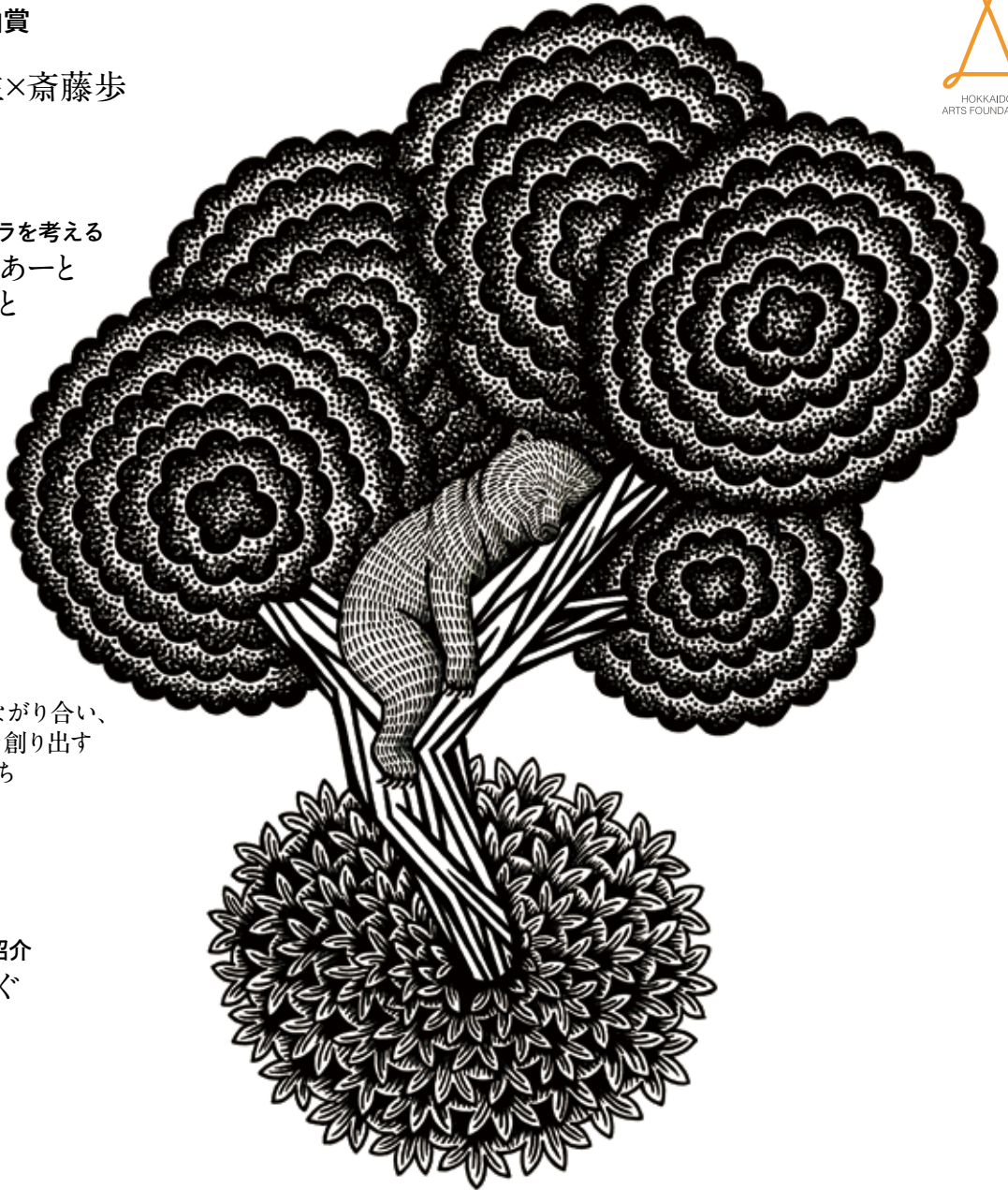
[砂川市]

エッセイ

長嶋 有

表紙作家の紹介

相川 みつぐ



HOKKAIDO  
ARTS FOUNDATION

## ●特集／北海道戯曲賞

# 「次代の劇作家を発掘する」 5年目の試みに向けて

全国に門戸を開き、北海道内外の劇作家が競い合う機会を創出する希望の大地の戯曲「北海道戯曲賞」。4回目の実施となる平成29年度は122作品の応募があり、2段階の審査を経て、大賞1作品、優秀賞1作品が選出されました。

過去4回全ての選考に当たってきた5名の審査員のうち、北海道文化財団アートゼミ「戯曲制作講座」の講師として北海道の演劇人と関わった土田英生さん、長年北海道での演劇創造と若手演劇人の育成に携わってきた斎藤歩さんに、戯曲賞選考や劇作家育成について話を伺いました。

— 対談 —  
土田英生 × 斎藤歩



10分間  
「タイムリープが止まらない」



58作品の応募からスタートした北海道戯曲賞。4回目となる平成29年度は25都道府県から122作品の応募がありました。作品の印象はいかがでしたか。

土田 最終選考作品のクオリティが上がったと感じています。各地で名前を知られている人の参加も増え、応募条件で在住地域を限定しなかったことが功を奏しているように思います。

斎藤 初年度は大賞がすんなり決まりましたが、2年目・3年目は飛び抜けた作品がなく、他の戯曲賞の状況などが気になりました。知り合いに応募を呼びかけもしました。

今年に光るものを感じる作品が複数あり、「審査員の好みで意見が分かれるだろう」と思いました。実際その通りになりましたね。選考に手応えがありました。

土田 審査員は全員が現役の作家ですし、自分たちが驚くもの、こんなの書けないな、すごいな、と感じる点のあるものを大賞に選びたいと考えていました。その意味で、大賞が出なかった年があることで戯曲賞として一定のレベルを保っていると思

平成29年度

大賞 『動く物』 本橋 龍（東京都）

優秀賞 『10分間～タイムリープが止まらない～』 中野 守（兵庫県）

審査員

長田 育恵（演劇ユニットてがみ座主宰） 斎藤 歩（公益財団法人北海道演劇財団 常務理事・芸術監督）  
土田 英生（劇作家・演出家/MONO代表） 畑澤 聖悟（劇作家・演出家/劇団「渡辺源四郎商店」店主）  
前田 司郎（作家・劇作家・演出家・映画監督/五反田団主宰）



います。

大賞『動く物』と優秀賞『10分間〜タイムリープが止まらない〜』は、どのような点が評価されたのでしょうか。

齋藤 『動く物』には男女2人しか登場せず、場面も変わらないのですが、会話が巧みで関係性を想像させる面白さがあります。現代劇として成立している。どんな演出ができるだろう、と興味をそそられる作品でした。

京への反発などもないようです。ギリギリした人が少ないのかな。齋藤 ギリギリした人は東京に出てしまおう面があります。北海道人はもっとこだわっている部分で「まあいいべや」と、良くも悪くも大らかですね。

僕が芸術監督を務める北海道演劇財団では3カ年の若手育成プログラムに取り組んでおり、北海道戯曲賞の受賞をミッションとして掲げています。短期間で達成することは難しいですが、こういったことを積み重ねていくしかない。人材育成は長期的に考える必要があると思います。

土田 演劇については講座だけでは

いのですが作者の作為が見えるようで、その点が残念に思いました。

齋藤 『10分間〜』については、つい面白がって読んでしまいました。相当な力量です。その分、ラストで「この仕掛けをやったただけ？」という手心えの軽さはありました。

土田 タイムリープを扱うこと自体は新しくないので、自分だけが同じ時間を繰り返して周囲との温度差が大きくなり、説明する気力もなくなっていく、そのリアリティが素晴らしいです。

この作品は上手いというよりも上手くいつてしまった例で、だから技巧が鼻につかないのでは。上手さだけなら、過去の選考作品により優れた

伝えきれないものがあります。徒弟制度、あるいは道外演劇人との交流で欲を持つことも大事かもしれません。

齋藤 北海道では演劇教育の伝統がないためか、若手演劇人はあまり戯曲を読んでいません。そのため箱庭みたいな範囲の戯曲を書いている。

選考会で、審査員の一人である長田育恵さんが「もっと遠くに行ける、もっと広い世界に突き抜けられるのに」という言い方で作品を惜しんでいましたが、若い人たちにはいい戯曲をたくさん読んで、もっと広い世界があることを知ってもらいたいと思います。

土田 「居心地がいいから知りたく



### 土田 英生

(劇作家・演出家/MONO代表)

1989年に「B級プラクティス」(現MONO)結成、1990年以降全作品の作・演出を担当。1999年『その鉄塔に男たちはいるという』で第6回OMS戯曲賞大賞を受賞。2001年文学座に書きおろした『崩れた石垣、のぼる鮭たち』で第56回芸術祭賞優秀賞を受賞。2003年文化庁の新進芸術家留学制度で1年間ロンドンに留学。テレビドラマ・映画脚本の執筆も多数。



「土田英生の戯曲制作講座」は平成29年11月からの3カ月間で3回実施。受講者8名がプロット制作の指導を受け、戯曲作成に挑みました。

たものがあつたと思います。齋藤 「上手いだけの作品を選びたくない」というのは、初回から審査員全員の考えでした。『10分間〜』は上手いだけではなく、作者が物語世界を腹に落として、身体で書いている感じがあります。土田 賞はその年の応募作品のバランスの中で、様々な点を話し合ってから決まります。前年までの作品について考え出すと、永久に大賞が出せなくなる可能性がある(笑)。僕は『動く物』については積極的に推しませんでしたが、他の4名の審査員の意見に頷けるものがあり、結果には納得しています。そして、3年ぶりに大賞を出せたことを嬉しく思っています。

北海道の演劇シーンでは劇作の弱さが指摘されています。北海道戯曲賞は次代を担う作家の発掘を目的としており、また今年度は、劇作家育成のために戯曲制作講座を実施しました。北海道の劇作家について、どのように感じていますか？

土田 面白いものに食らいつくテンションがあまり高くないですね。東

ない」「どうせ叶えられない」という、欲望のなさの問題もあるでしょうね。

「売りたい」という俗っぽい野心には「表現とはそういうものじゃない」と言いたいです。僕らも人間だから(笑)、俗な野心と純粹にいい作品を創りたい気持ちを行き来しながら成長するわけです。その根っことなる欲望を「持つていい」ということを、戯曲講座に参加した人たちの今後の交流で伝えたい。

地方で演劇を創りながら東京で活躍もできる道が見えれば欲望を持つのではないのでしょうか。例えば名古屋には北村想がいて、東京に行かなくても活動できる姿を見せたという



受賞作品は「北海道戯曲賞受賞作品集」でお読みいただけます。ご希望の方は当財団までご連絡ください。

功績があります。齋藤 僕もそうですが、俳優は東京へ出て活躍する道が見えている。むしろ劇作家は身体が必要ないですし、札幌にいながら東京でも活躍する人が現れてほしいですね。

平成29年度大賞作品『動く物』は、3月11日に北海道の若手演劇人による演出でリーディング公演を行いました。来年度も戯曲賞の実施と共に、講座やワークショップなどの企画を複合的にを行い、道内の劇作家の育成を図りたいと考えています。本日はありがとうございました。

聞き手 市川浩康

(北海道文化財団チーフマネージャー)

衛生的で機能的な空間である病院。びょういんあーとぷろじえくと(以下、ぷろじえくと)はそこにアートを展示することで印象に変化を与え、訪れる人たちに慰めをもたらす取り組みを行っています。

活動のきっかけは、ぷろじえくと代表で画家の日野間尋子さんが、欧州滞在時にオーストリアの病院のロビーを利用したアートの展示を見たこと。強く感銘を受け、帰国後の2008年、札幌ライラック病院の協力を得て取り組みをスタートさせました。「病院を訪れるのは命と向き合わざるを得ない人たち。アートの創造も生命の力に向き合うという点では通じるものを感じていた」と日野間さんは語ります。

当初の展示は、日野間さんが勤務する養護関連施設の活動で制作した作品が中心でした。しかし2013年から活動に興味を持ち、アーティストが参加するようになり、作品や展示はより芸術性を高めた内容に変化。現在では21名の作家が活動に参加しています。

療養空間にアートを飾り、心に栄養・癒し・励ましを

「衛生的で機能的な空間である病院。びょういんあーとぷろじえくと(以下、ぷろじえくと)はそこにアートを展示することで印象に変化を与え、訪れる人たちに慰めをもたらす取り組みを行っています。

活動のきっかけは、ぷろじえくと代表で画家の日野間尋子さんが、欧州滞在時にオーストリアの病院のロビーを利用したアートの展示を見たこと。強く感銘を受け、帰国後の2008年、札幌ライラック病院の協力を得て取り組みをスタートさせました。「病院を訪れるのは命と向き合わざるを得ない人たち。アートの創造も生命の力に向き合うという点では通じるものを感じていた」と日野間さんは語ります。

当初の展示は、日野間さんが勤務する養護関連施設の活動で制作した作品が中心でした。しかし2013年から活動に興味を持ち、アーティストが参加するようになり、作品や展示はより芸術性を高めた内容に変化。現在では21名の作家が活動に参加しています。



(上)「光の天使と出会う」/2017年  
(右上)「庭で耳を澄まして」/2013年  
(右下)クリスマスコンサート【演奏者】池野 麻里  
アイリッシュハーブ/2017年



◎参加アーティスト  
會田千夏/石垣伯江/石垣わかな/伊藤幸子/井上始子/上嶋秀俊/上嶋ミカ/小川豊/小山めぐみ/佐藤綾香/佐藤隆之/柴田紀恵/瀬川葉子/高橋佳乃子/鄭英姫/中丸大輔/野村裕之/日野間尋子/藤山由香/山田恭代美/吉田恭子

10年間という活動の継続から、ぷろじえくと同様の活動が北海道のあちこちの病院で見られるようになってきました。「医療という緊張感や孤独感を感じがちな場に、アートが働きかけることができるものがある」。アートと社会の関わりの一つのあり方として定着することを願って、ぷろじえくとの取り組みは続いていきます。

「参加しているアーティストには、アートが病院を訪れる人にとっての癒しや励まし、解放感に繋がればという想いがあります。またギャラリーという特定の空間ではなく、日常的に人が訪れる場所に作品を展示することで新たな意義を見出し、現在では展示だけではなく、音楽家による演奏会も実施しています。また、アーティストの活動は完全なボランティアではなく対価が支払われており、「アーティストの活動の価値の社会認知にも繋がれば」と日野間さんは考えています。

平成29年度 アート選奨 (アート選奨K基金事業)

北海道文化財団では磯田憲一氏からの指定寄附を基に、アート選奨K基金を創設。当財団が主催・共催・支援する芸術文化活動などの中で特筆すべき活動を行い、本道の芸術文化の振興発展にとって「敬愛」すべき役割を果たしたと認められる個人・団体にアート選奨を贈呈しています。平成29年度の受賞者は、舞台監督の尾崎要さんに決定いたしました。

この人に注目!

尾崎 要さん

舞台監督



「美術、照明、音響、映像など舞台に付随する全てを、演出家の意図する方向に整える役割」を担う舞台監督。舞台芸術を成立させるためには不可欠な存在で、専門的なスキルと経験が必要とされます。

尾崎要さんは舞台製作やイベント企画を行う札幌の会社に就職、1997年頃から舞台監督としての経験を積んできました。31歳のときに独立し、仲間と共に「アクトコール株式会社」を設立。以降、ダンスや演劇などの舞台づくりに携わっています。

「専門家が揃っていれば解決できることも、北海道では難しい場合がある。時間や予算、建物の都合でできないことを、どう解決するか。例えば映像で難しいことを照明でカバーしましょうと提案したりもします」と尾崎さん。東京の商業ベースの舞台とは違い、北海道では制作面などの弱い部分を補うことも舞台監督の役割だと考え、自らを「舞台裏の便利屋」と表現します。

また尾崎さんは、札幌を代表する存在となっている劇団千年王国、札幌の複数のバレエ団体によるWe Love Ballet 実行委員会に、プロデューサーや制作担当として参加しています。千年王国では、時間を惜しまず完成度の高いものを作る姿勢と作品の魅力に感動し「多くの人に知ってもらいたい、そのための環境を整えたい」との思いがあるとのこと。We Love Ballet 実行委員会は、「バレエの振興のために、札幌の全てのバレエ団体が参加する舞台をいつか創りたい、そのためのステップになるのでは」と考えているそうです。

道内の舞台芸術活動の状況に精通し、演出家・振付家からも厚い信頼を得ている尾崎さん。その視線は劇場内に留まらず、地域全体の舞台芸術の創造環境を支え、北海道から舞台芸術を発信する未来に向けられています。



劇団千年王国「贖作者」

## 画歴60年以上の境地 洋画家 銚井直作

のびやかな線と色彩の抽象的な静物画に、重厚で静謐な雰囲気をつたえた山の風景画。洋画家・銚井(ほこい)直作さんの画風は、一見、複数の人が描いたかのようにさまざまです。「絵はだらかに、自由な心で描くものなんだよ」と銚井さんが言うように、画風は違っても、すべてに共通しているのは「だらかさ」です。かつて、空知管内の中学校の美術教師をしながら創作活動をしていた銚井さんが、子どもたちへの美術教育で大切にしていたのが、だらかで自由な心でした。それは自らの作品を描くときの力にもなったと話します。

銚井さんの作品は、砂川市内のホテルや病院などにも多く飾られ、人々の日常のなかに溶け込んでいます。「街中が自分のギャラリー」と笑いますが、国内外での賞を多数受賞するなど、その作品は高く評価されています。平成29年度には、油彩では空知管内で40年ぶりという北海道文化賞を受賞しました。画歴60年以上を経て、創作意欲はさらに高まっているようです。

●砂川市空知太東2条3丁目1-1(自宅ギャラリー・アトリエ)  
☎0125-53-2304 ※見学の際は要連絡



30年以上愛用のコートで  
自画像として描いたH氏の偶像



砂川市立病院のロビーに掛けられた「ボルト」は病氣と戦う力を表現。



閉店後の酒場に並ぶボトルに物語を想像し、抽象的に表現した「宴のあと」



武豊騎手など有名ジョッキーの鞍の製作も請け負う

大きな物から小物まで、すべて修理可能

併設のショップではラインナップが一堂に揃う

## 馬具づくりの伝統を現代に ソメスサドル

1964年、砂川市の隣・歌志内市で創業。炭鉱が衰退するなか、新しい産業として馬具づくりに取り組んだのが始まりです。札幌の二条市場で農耕用馬具を作っていた職人たちを採用し、始めは海外向けの乗馬用馬具を作っていました。北海道の開拓を支えた馬具づくりの技術の多くは、時代とともに失われましたが、姿を変えてここに受け継がれています。現在は、おもに国内向けの馬具と、バッグや財布などの革製品を手がけており、砂川市の工房で作られています。

ソメスサドル最大の特徴は、一貫生産であること。工房内で革の裁断や加工、そして縫製までを行っているのは、大手メーカーでは珍しいことです。職人はみな一通りの工程を経験し、全体の仕事を理解した上で、ひとつのものを作り上げます。馬とともに歩んできたものづくりの伝統は、今後も守られ続けていくのでしょうか。

●砂川市北光237-6 ☎0125-53-5111  
営業時間 10:00~18:00(砂川ファクトリーショップ)  
定休日 年中無休 www.somes.co.jp

## Column 砂川の魅力を発信 すながわスイートロード+sunagaworks(スナガワークス)

砂川市内の国道12号周辺の商店街には、古くから菓子店が建ち並んでいました。砂川のお菓子は周辺の炭鉱や地元工場で働く人々の疲れを癒し、おみやげにも喜ばれていたといえます。市では2002年、商店街を「すながわスイートロード」と名付け、まちの魅力として発信。現在18店となり、市内外から砂川スイーツを求めて多くの人が訪れるようになりました。

この取り組みをきっかけに、独自の活動も生まれています。作家、デザイナー、カフェオーナーが「私たちの視点で砂川の魅力を発信したい!」とsunagaworks(スナガワークス)を結成。現在は、CAFE MEDERU(メデル)店主の佐々木智世佳さんを代表に、mignonさん(ミニョン)、ものづくり作家chaoさん(チャオ)の3名で活動しています。

砂川の風景写真を使ったオリジナルカレンダーや、スイートロードのお菓子のマスキングテープを製作すると、たちまち大人気に。今まで知らなかった砂川の「いいところ」を、発見する楽しみを教えてください。



お菓子のマステなどのオリジナルグッズ。写真とデザインはmignonさんが担当



元質屋を改装したカフェでは、sunagaworksによるグッズや作家の作品も販売

●sunagaworks  
砂川市西1条南4丁目1-13 CAFE MEDERU(カフェ メデル)内  
☎0125-74-5146 営業時間 10:30~17:00 営業日 日~火曜 ※日曜は臨時休業あり  
sngw2016.thebase.in(スナガワークス オンラインストア)  
●すながわスイートロード協議会  
https://www.facebook.com/sunagawa.sweetroad/?fref=ts



## 街歩きアート 人と人がつながり合い、 新しいものを創り出すスイートなまち [砂川市]

空知管内に位置する砂川市は、周辺に広がる産炭地の石炭を運び出す鉄道によって発展しました。交通の要として、炭鉱の労働者やその関連工場の人々が集まり、活気に溢れていたといえます。当時から立ち並ぶ菓子店は、その頃の変わらない味を伝えるとともに、若い世代の新たな発想で進化し続けています。さらに文化や芸術、ものづくりの分野にも市民が積極的に関わり、まちの新たな魅力を創りあげる力となっています。

### 市民とともに文化・芸術を育てる場

## 砂川市地域交流センター ゆう

2007年1月、老朽化した砂川市民会館に代わり誕生した施設です。まちの文化拠点として計画され、市民がメンバーとなっているNPO法人ゆうが企画・運営しています。特徴的なのは、アートコーディネーターが置かれたこと。その役割を担う太田晃正さんは、舞台芸術の専門家として設計段階から関わりました。まわりの市町村には音楽ホールが充実していたことから、演劇や舞踊に適した劇場をつくることになり、どんな劇場にするか、まちの人がどう使いたいかなど市民と意見交換し、ハードではなくソフト面から具体的なかたちにしていきました。

それにより、外へ開く大扉を奥舞台に設置するという、道内ではほかにない設備が実現。外から直接舞台に車を入れるなどのドラマチックな演出も可能です。さらに、音響や照明などの舞台技術者も配置し、本格的な舞台環境を整えました。そのほか、入り口の吹き抜けのロビーを広場のようにしたところ、市民が自発的にイベントを開催。手作りマーケットなどで賑わうようになりました。

また、子どもに関する設備も充実。2階にはプレイルームなどの「子どもゾーン」が設けられています。そして、「ゆうの



キッズ落語では、全国大会で入賞する名人も誕生している

未来を育てるのは子どもたち」というコンセプトに基づき、開館時に立ち上げた子どもたち中心の音楽劇をきっかけに、市民劇団「心呂(ころ)座」やキッズジャズスクール、キッズ落語、子ども人形劇といった活動も続々誕生。開館から10年を迎えた今、当時の子どもたちが大人になり、舞台を志す人も現れました。

また、市民のアイデアで開催した「百まい襦展」は、札幌国際芸術祭連携事業となり、札幌芸術の森美術館での展示も行われました。ゆうは、人と人、さらに、まちとまちをつなげる役割を担う場として、市民とともに育っています。



●砂川市東3条北2丁目3-3  
☎0125-54-3111 開館時間 9:00~21:00 休館日 不定休  
www.you-yukai.com



上/子どもたちが中心となって演劇作品を作る「円座」の公演  
左/広々としたロビーは、市民の交流スペースとして活用

## 表紙作家の紹介



木の上で寝る熊

相川みつぐ イラストレーター・作家  
Mitsugu Aikawa

1976年生まれ。北海道造形デザイン専門学校卒業。2008年より活動をスタート。得意のフリーハンドで描く「線」から生まれる作品はハードなものから繊細なものまで、タッチを自在に使い分け製作している。2011年より、白老にある飛生アートコミュニティ主催の『TOBIU CAMP』のビジュアルを担当するほか、作家活動、店舗などの壁画製作・イベントポスター・キャラクター製作・商業CMイラスト等、幅広く活躍中。



Airo

- 〔個展〕
- 2018年 "ゲソportrait" FAR OUT EAST Gallery/札幌
  - 2014年 "I.S.P.D.I" TO OV café/札幌
  - 2014年 "七福神" The green leaf hotel/ニセコ
  - 2013年 "PSYCH-POP" FABULOUS WALL /札幌
  - 2013年 "Japanese Seasonal Festival" TO OV café/札幌
  - 2012年 "Märchen" TO OV café/札幌
  - 2011年 "Ms Stpelopinx" TO OV café/札幌
  - 2010年 "PSYCH-POP" TO OV café/札幌

- 〔グループ展〕
- 2017年 "アートフェア札幌 2017"/札幌
  - 2017年 "札幌国際芸術祭 2017"/札幌
  - 2017年 "A Lucky Cat Exhibition" Gallery X by PARCO/東京
  - 2017年 "はるうらら" FAR OUT EAST Gallery/札幌

- 2017年 "飛生芸術祭 2017" 飛生アートコミュニティ/白老
- 2016年 "飛生芸術祭 2016" 飛生アートコミュニティ/白老
- 2016年 "はるうらら" flower Little Gallery/札幌
- 2015年 "飛生芸術祭 2015" 飛生アートコミュニティ/白老
- 2014年 "星の風景" 札幌芸術の森美術館/札幌
- 2012年 "ILL POP COMMUNICATION"-analog-で参加 ARTERY GALLERY/バンコク、タイ
- 2011年 "THE BEGINNING"-analog-で参加-PARCO2/札幌
- 2011年 "飛生芸術祭 2011" 飛生アートコミュニティ/白老
- 2010年 "飛生芸術祭 2010" 飛生アートコミュニティ/白老
- 2009年 "UNBALANCE" イラストユニット "analog" 札幌補聴器センター/札幌
- 2009年 "the IMAGICAL vol.002" CAI02/札幌
- 2009年 "the IMAGICAL vol.001" CAI02/札幌
- 2008年 "CONTRAST" イラストユニット "analog" 中目卓球ラウンジ/札幌

## ガンダム将棋倒し

東室蘭に「はっぴいとーく」というおもちゃ屋があった。「はっぴい☆とーく」と星が入っていたかもしれない。あの店を凌ぐおもちゃ屋に出会ったことはない。三階建てだったか五階建てだったか、とにかくすべての階がおもちゃ売り場だ。細く狭いビルだったと思うが、下から上まで、のぼってものぼっても全部おもちゃ。鼻血が出そうだ。店舗の狭さもまた、おもちゃの密度（＝囲まれ感）を高めていただろう。滅多に連れて行ってもらえなかったから、余計に神格化された。買ったものは覚えておらず、場所だけが今も記憶に残る。「王様のアイデア」的な手品グッズのような品もあって、大人の会話にも出てきた。内装も妙にシックだった（気がする）。

ガンダムブームのころ、事件があった。人気のプラモデルの新作入荷の日、殺到した子供達が狭い店舗のエスカレーターで転倒し、怪我をした。「ガンダム将棋倒し」という地元紙の見

出しをみた覚えがある。それ以前に、プラモデルの塗装に用いるシンナーが引火する事件が相次いで「ガンダム火事」と呼ばれ、問題視されていた。つまり、ガンダムが子供らによくない影響を与えているという文脈で、「火事のお次は」ということを含意した見出しだ。これも、そういう文脈を超えて忘れたい。見出しではなく、技みたいだ。ガンダム将棋倒し。無論、怪我をした子は可哀想だが、あの狭い店内で、皆が駆け上がるうとしたんだな。今は万年不景気の街だが、あどけない熱気がそこにたしかに沸いていたのだ。



長嶋 有 (ながしま ゆう) 作家

1972年生まれ。『猛スピードで母は』で第126回芥川賞、『夕子ちゃんの近道』で第1回大江健三郎賞、『三の隣は五号室』で第52回谷崎潤一郎賞を受賞。著作に『もう生まれたくない』『フキンシンちゃん』『観なかつた映画』など。



in the forest

### ◎北海道文化財団アトスペース企画展 vol.35

相川みつぐ 個展『UNBEATEN -odori W5-』  
会 期:平成30年3月7日(水)～6月8日(金) 9:00～17:00  
休館日:土・日・祝日 ※都合により臨時休館する場合があります。  
会 場:北海道文化財団アトスペース (札幌市中央区大通西5丁目11 大五ビル3F)  
入場料:無料

## 財団事業インフォメーション (平成30年3月)

## こぐま基金事業

## ●希望の大地の戯曲「北海道戯曲賞」

全国に門戸を開き、次代を担う劇作家や優れた作品を発掘するとともに、道内外の作家が互いに競い合うことで、北海道における演劇創作活動の活性化を図ることを目的に設立された北海道戯曲賞。昨年度、一昨年度と大賞作品の該当がありませんでしたが、今年度は応募総数122作品の中から、3年ぶりの大賞作品として『動く物』(本橋龍作)と優秀賞『10分間～タイムリープが止まらない～』(中野守作)の2作品が選ばれました。

## 大賞

## 『動く物』

(賞金50万円、記念盾)

作:本橋 龍さん

(東京都/劇作家・演出家・  
ウングツィーファ)



## 【受賞者プロフィール】

1990年さいたま市生まれ。高校の部活で演劇を始める。2009年、尚美学園大学に入学。若林一男教授の下演劇を学ぶ。2013年に大学を中退後自身の創作ユニット「栗☆兎ズ」で劇作活動を本格的に始める。2016年、江古田に居住し活動の拠点である「栗☆兎ズ荘」(後のウング荘)を構える。2017年ユニット名を「ウングツィーファ」に改名。

## 優秀賞

## 『10分間～タイムリープが止まらない～』

(賞金5万円、記念盾)

作:中野 守さん

(兵庫県/劇作家・演出家・  
中野劇団主宰)



## 【受賞者プロフィール】

1973年奈良県生まれ。1992年、龍谷大学劇団未踏座で演劇を始め、大学卒業後も印刷会社に勤めながら演劇活動を続ける。1998年、『振替平日』で早稲田大学演劇博物館創立70周年記念戯曲賞入選。2003年、京都で中野劇団を旗揚。全公演の脚本・演出を担当。現在も京都・大阪で活動中。

## 人づくり一本木基金 (長原賞・スチウレ・エング 人づくり基金)

## ●ものづくり一本木選奨

「人づくり一本木基金」の顕彰事業として、工芸美術及びものづくり等の分野における人材育成と創造活動の振興発展のため、道内在住又は道内出身者で、その向上発展に関し功績が顕著な方々に、「ものづくり一本木選奨」を贈呈しました。

## ものづくり一本木選奨 奨励賞 (賞金10万円、記念楯)

(五十音順)

## 木村 直樹さん

(硝子作家、㈱KIM GLASS DESIGN代表取締役社長)

- ・平成28年第55回日本現代工芸美術展で現代工芸賞を受賞。
- ・平成29年LEXUS NEW TAKUMI PROJECTの「匠」に選出。
- ・小樽硝子作家协会初代会長、小樽がらす市実行委員会3代目実行委員長

## 下條 恭平さん

(家具職人、(有)ワカサ)

- ・平成26年第52回技能五輪全国大会家具部門に初出場し、銅賞受賞。
- ・平成28年第54回技能五輪全国大会家具部門に出場し、銀賞受賞。
- ・平成29年第44回技能五輪国際大会(開催地:アラブ首長国連邦)家具部門に出場し、敢闘賞受賞。

## 春木 智慧さん

(縫製工、(株)札幌白衣)

- ・平成28年第54回技能五輪全国大会洋裁部門に初出場し、敢闘賞受賞。
- ・平成29年第55回技能五輪全国大会洋裁部門に出場し、銅賞受賞。

## 山尾 優希菜さん

(建具工、(有)高橋加工部)

- ・平成29年第55回技能五輪全国大会建具部門に出場し、金賞受賞。北海道代表の旗手を務める。

※ものづくり一本木選奨 長原賞については、該当がありませんでした。